

このタッチ、この音色……
私たちが“グランフィール”をおすすめします。



グランドピアノの“あの”響きを、タッチを、アップライトピアノに。

Granfeel®



ピアニスト

野原みどり (のはら みどり)

アップライトピアノの弾き難さを改善する画期的な発明。グランドピアノのタッチに近くなり、無理の無い弾き方を身に付ける手助けになります。

【プロフィール】

クリアな音色とスケールの大きい音楽作りに定評がある。1991年リスト国際コンクール第2位に続き、1992年ロン＝ティボー国際コンクールで優勝を飾り、審査委員長ロリン・マゼールに認められてフィルハーモニア管、ピッツバーグ響と共演。国内でも小澤／新日本フィルをはじめ各地のオーケストラから招かれている。リサイタルも数多く、2001年にはラヴェル全曲演奏会が絶賛された。「ラヴェル：ピアノ作品全集I、II」「月光」(アウローラクラシカル)のCDも好評。最近ではシューベルトに意欲的に取り組み、新たな境地を開いている。

現在、京都市立芸術大学准教授。名古屋音楽大学客員教授。



ピアニスト

江崎昌子 (えざき まさこ)

アップライトピアノでは作曲者の想いを表現するために左のペダルを多用していましたが、グランフィールはタッチで表現できることが素晴らしいです。

【プロフィール】

ショパン研究家として世界中で評価が高い。桐朋学園大学を卒業後、ポーランド・ワルシャワショパンアカデミー研究科修了。

1995年第6回ミロシ・マギン国際ピアノコンクール第1位、1997年第4回シマノフスキ国際ピアノコンクール第1位及び最優秀シマノフスキ演奏賞、1998年第21回サレルノ国際ピアノコンクール第1位及び最優秀ドビュッシー演奏賞、2005年第31回日本ショパン協会賞受賞。2010年ポーランド政府より、外国人に贈られる文化勲章を受勲。

ショパンのエチュード全曲集、マズルカ全曲集、ソナタ全曲集、ノクターン全曲集をリリースし、共にレコード芸術誌において特選盤となる。

現在、洗足学園大学准教授、日本ショパン協会理事。



ジャズピアニスト

松本圭使 (まつもと けいし)

従来のアップライトピアノの最大の弱点である鍵盤の戻りの鈍さをクリアし、ノンストレスで表現したい事を弾ける。アップライトピアノに起きた革命と言っても過言ではありません。

【プロフィール】

鹿児島出身。幼少よりピアノを始め、18歳よりピアニストとして音楽活動。その後、ジャズピアノの研鑽を積むためNYへ留学。現在、自己のリーダートリオをはじめ、鹿児島を拠点に全国的に演奏活動を展開。リーダートリオとして1st ALBUM「The Other Side Of It」、2nd ALBUM「LIFE ABOVE DEE」を全国リリース、2014年にはデュオ「11-eleven」を発売。CM音楽制作、「観光列車おれんじ食堂」音楽プロデュースなど、活動は多岐にわたる。鹿児島県阿久根市の『にぎわい交流館阿久根駅』では、音楽文化による地域活性化事業として定期ライブを主宰、「一地方都市から全国的に誇れる音楽を発信する」というコンセプトでの活動は、新聞や雑誌にも取り上げられる。また、鹿児島大学JAZZ研究会の特別講師としてセミナーを開催、後進の育成にも注力している。「モントルー・ジャズ・ピアノコンペティション・インかわさき2014」では、ファイナリストのひとりに選出された。2016年第42回鹿児島市春の新人賞を受賞。ジャズ部門での受賞は初。



ソリスト(ピアノ)

林田 賢 (はやしだ まさる)

某輸入ピアノメーカーの新製品デモンストレーション演奏の為に邪魔した熊本の楽器店さんで、初めてお目にかかった藤井さん。「アップライトピアノがグランドピアノのタッチになる部品を試作中なんです!」。とても嬉しそうに、しかし極めて真剣に、コテコテの薩摩アクセントでお話されるのがとても印象的だった。ピアノは完成の域に達したと言われて久しいのに、今さらそんな魔法みたいなことできるのかいな?というのがその時の正直な感想であった。そのわずか数カ月後「製品化の目途も立ち特許も申請したので、ぜひ弾いてみて欲しい」とのご連絡をいただき、極めて興味本位に、薩摩川内の藤井さんの店へと向かったのがあった。藤井さんに促され半信半疑のまま、その特許パーツが取り付けられたアップライトピアノを弾いてみて驚いた。これまでアップライトピアノだからと諦めていた表現が、グランドピアノ並みに何でもできちゃう!「どうして?」と訝しがる僕に藤井さんが丁寧に説明して下さる内容は、確かに理に適っている。コロンブスの卵の発想から生まれたこのキットが組み込まれたグランフィールは、アップライトピアノのネガティブな要素をことごとく払拭し、その優れたタッチによってイメージ通りの音楽表現を可能にする、演奏者にバリエーションな唯一無二のアップライトピアノであり、ピアノ史を塗り替える画期的な発明だ。様々な制約でグランドピアノを諦めている全ての方へ、自信をもっておすすめします!

【プロフィール】

長崎市生まれ。長大附属小中学校、県立長崎南高校を経て、桐朋学園大学音楽学部演奏学科に入学。第6回飯塚新人音楽コンクールにてピアノ部門第1位受賞。87年より5年間、米インディアナ大学音楽学部留学、パフォーマー・ディプロマ修了。在学中、フルートのキャロル・ウィンセンス(現ジュリアード音楽院教授)に抜擢され共演、その模様がナショナルパブリックラジオを通じて全米に放送されたのを機に、本格的にコンサート活動を開始。室内楽奏者/伴奏者としてそのアンサンブル力には定評があり共演者の信頼も厚い。また長崎県新人演奏会、若い芽のコンサートや各種コンクールの審査員を歴任。

現在、長崎大学非常勤講師、長崎県音楽連盟副運営委員長、ふらっとb2480館主。



ドイツ国家資格 ピアノ製作マイスター
(Klavierbaumeister)

加藤正人 (かとう まさと)

グランドピアノのタッチの優位性を示すのに連打回数をアップライトピアノと比較し表記するのはどこか違う感じがする。グランドピアノが弾きやすいと感じる要素の一つとしてレガートな連打ができる事があげられるのではないだろうか。

音を止めるアクションの部位をダンパーと言う。ダンパーは、鍵盤が底から上に半分戻った所で弦の振動を止めるような動きに通常設定してある。アップライトピアノではアクションの構造上の問題で、鍵盤をその位置(深さの半分の位置)よりも上に持ってきってから再度下げないと次の音が出ない。すなわち次の音が出る時は、ペダルを踏んでいない限り前の音は切れてしまう。しかしグランドピアノでは、鍵盤を底から半分戻す位置よりも下の位置から再度下げても次の音を出す事ができる。すなわち前の音を残したまま次の打弦ができる。グランフィールはこのグランドピアノのタッチ感覚をアップライトピアノで可能にした。更に言えば、グランドピアノの鍵盤の底の方で感じる抵抗感が、グランフィールを搭載した場合得られた。この抵抗感が、ピアノニッシモのコントロール性を向上させている。

昔から、アップライトピアノでグランドピアノの様な連打性能を備えたアクションは作られている。しかし、その複雑な機構故結局定着しなかった。21世紀に登場したグランフィールは、スペースメリットのあるアップライトピアノがその独特なメカニズム故に妥協していた部分を大きく補ってくれた。

【プロフィール】

日本ピアノ調律師協会会員 国際局参与

1982年: 国立音楽大学別科調律専修修了

1988年: ベルリン市 ベヒシュタイン本社技術研修

1989年: 渡独 メーカーと技術コレスポンデント担当

1992年: ベヒシュタイン本社にてピアノ製作実務を行う。

1993年: ピアノ製作マイスター試験合格。同年 帰国

カリスマ技術者として技術セミナーその他でも、その博識はおなじみ。

現在、ユーロピアノ代表取締役社長



アメリカ技術者協会RPT資格認定会員
コンサート・チューナー

名取孝浩 (なとり たかひろ)

アップライトピアノは1800年にホーキンスによって発明され場所を取らないという事で普及したようですが、世界中の技術者はより専門的に弾くにはグランドピアノの機能が必要で、それに近づける努力をした長い歴史があります。チャレンジした方は世界中数知れず、その中でかなり近い効果を得たものも少なくありませんが、楽譜上のインテンポで弱音連打が可能なアップライトピアノを作っているメーカーは未だありません。グランフィールは先人達の想いが形になったとも言えます。グランフィールは、アクションに数点の部品を加え調整するというものでグランドピアノにしか出来なかったタッチに替える事が出来ます。グランドピアノではレペティションレバーがあるおかげでハンマーが空中に静止した状態で揃えられています。グランフィールもハンマーレールを外してもシャンクはその位置に留まります。グランドピアノは連打出来る状態を確認するのに鍵盤を下まで弾き、指先の力を抜くとスプリングの力でハンマーがふわっと上に持ち上がりジャックがローラー下部に滑り込むのと同じく、グランフィールは力を抜くとハンマーが前方に進みジャックが戻ります。ベートーヴェンがワルトシュタインから使い出した1821年エラル社発明の「ダブルエスケープメント」というアクションが可能にした弱音連打、ようやく同様な機構がアップライトピアノにも可能になりました。長く愛され続けられるものには、そこに宿る魂と経年経過による存在感が大切なのはピアノに限った事ではありません。大切なお自身の時間を満足して送って頂ける様、私は「グランフィール」をおすすめします。

【プロフィール】

東洋ピアノ研究生として浜松でピアノ製作後、渡独。

ドイツ国立楽器製造学校鍵盤楽器科修了。

5年の間ドイツ・スイス・オーストリアにて研鑽を積み帰国、ピアノ復元修理などとともに一般家庭から外国人アーティストの調律及びピアノに関わる事を全般に行っている。日本ピアノ調律師協会常任委員、アメリカ技術者協会RPT資格認定会員(在日日本人初)。また、スマイルピアノ500という活動で東北被災地支援をピアニスト西村由紀江氏と共に行っている。



コンサート・チューナー

齋藤信哉 (さいとう しんや)

人間の耳ではアップライトピアノは低音側の音量が大きく、高音側にいくにしたがって音量が小さく聞こえる傾向がある。高音側の旋律を際立たせようと、少々強めに弾いて、伴奏の低音側の音量を抑えて弾こうとしても、なかなか弱音で演奏することができない。それどころか音がすっぱ抜けてしまうことさえある。

この原因はグランドピアノを立ててしまったような、それでいて四角い箱型にしなければならないアップライトピアノの形状と、アクションと呼ばれるメカニズムにあるのだが、これに対してグランドピアノでは、こうした問題は生じない。したがってアップライトピアノで練習をしている人は、弱音、とりわけ低音側の弱音をうまく弾くことができないので、グランドピアノを弾いたときにも、低音側の音量が大きくなってしまいう傾向がある。

こうしたアップライトピアノの欠点を補うべく、昔からさまざまなメカニズムが考えられ、市場に出てきたが、決定打はいまだかつて無かったといえよう。なぜかという、グランドピアノに近づけるべく、連打性を高めることばかりに開発の重点を置いていたからだ。グランフィールは、ここまでやるのかと思えるほど、アップライトピアノのメカニズムをグランドピアノのメカニズムに近づける工夫が凝らされており、連打性はもとより、全鍵にわたって弱音の演奏性を高めている、恐らくこうした機構の決定打といえるものだと思う。

【プロフィール】

神奈川大学を卒業後、楽器店に勤務。

調律・営業業務を31年間勤めた後、活動の場を広げるべくフリーランスとなる。

調律の傍ら、楽器店の店舗コンサルティング、人材育成研修、音楽大学での講義などを行っている。

2007年5月に幻冬舎より「ピアノはなぜ黒いのか」を出版。



〒895-0027 鹿児島県薩摩川内市西向田町15-11

URL <http://www.fujiipianoservice.jp>

ホームページ

藤井ピアノサービス

検索

お客様相談室 ☎0996-25-3320

E-mail : fujiipiano@po5.synapse.ne.jp

受付時間：木曜日以外10:00～18:00